

島根県竹島問題研究顧問

藤井 賢二

黄海巡る中韓の対立



ふじい・けんじ 第5期
島根県竹島問題研究会最終
報告書に「韓国社会科教育
における竹島問題の取扱い
について」など掲載。

朝鮮半島と中国の間にある黄海を巡る中韓の対立を、韓国の新聞記事（電子版）で紹介したい。

2024年、中国が暫定措置水域に養殖施設として設置した構造物について、韓国政府は25年2月26日に調査に乗りだした。しかし中国に妨害され、中国海警局と韓国海洋警察庁が対峙する事態が発生した。

中国はすでに南シナ海で人工島を次々と造った上で「中国の領海だ」と宣言しているが、黄海でも同様の恐れがある。3月19日付「朝鮮日報」社説は、このように危機感を示した。

暫定（措置）水域は、二国間の距離が近いため排他的経済水域（沿岸国のみがその海域の資源を管理でき、他国は許可なしに利用できない）が重なる海域に設けられた。相手国から規制を受けずに漁業活動できるが、漁業資源保護については両国が責任を持つ。

4月23日に開かれた協議で、構造物設置は一方的な現状変更行為で漁業資源にも悪影響を与えると韓国は撤去を要求したが、中国は拒否した（4



李承晩ラインの記憶継承

月24日付「中央日報」。4月28日付「朝鮮日報」によれば、この時中国は03年に韓国が暗礁「ソコトラロック」に建設した離於島海洋科学基地を問題にできたという。

この逆襲に対して前記「朝鮮日報」記事は「離於島から韓国国民が住んでいる馬羅島まで距離は149キロしかないが、一方離於島と最も近いという中国の無人島は247キロも離れている」と、韓国の行為を正当化した。未来の中韓間境界画定交渉を見据えた主張である。

ソコトラロック周辺は戦前から日本の漁業者に知られた好漁場だった。建国後韓国が広大な海域の漁業資源独占のため李承晩ラインを計画した時、まず囲い込んだのは竹島ではなくこの暗礁の周辺だった。

さらに、4月30日付「朝鮮日報」はもう一つの中国への不満を伝えた。それは、中国が黄海に一方的な「作戦ライン」を引いて東経124度線よりも西側で韓国海軍が活動しないよう要求しているというものである。この東経124度線は李承晩ラインの境界線だった。

70年以上前に韓国が設定して日本漁船拿捕の口実とした李承晩ラインは、1965年の日韓国交正常化の時に実質的に撤廃された。それが今、中韓対立の中に見え隠れする。かつて韓国が警戒したのは日本漁船だったが、現在は中国の脅威（「朝鮮日報」は「西海工程」と呼ぶ）である。保守言論の「朝鮮日報」は3月24日付社説で、共に民主党は中国人工構造物になぜ沈黙するのかと左派野党を非難した。中国への感情の微妙な違いは韓国の政治対立にも関係しており、韓国新政権の対応が注目される。